

講演

「青年の無気力」研究から

名古屋大学医学部教授 笠原 嘉 先生

I まえがき

「青年の無気力」という題で話を展開するが、どうしたら無気力が直るかという処方箋はないので、期待はずれになるかも知れないが予め御了承戴きたい。研究というのは概して役に立たないものであるが、21世紀に向って少しでも解明していかなければならないと思う。「青年の無気力」ということに関心を持ったのは、10数年前大学紛争があり名古屋大学でも随分荒れた頃である。丁度学生の精神衛生という仕事をしており、一方で学生は非常に生き生きとしているのかかわらず、一方で非常に無気力な学生が沢山いるということに気づき、以後本来の仕事の傍らどうして青年があの様に無気力になるのだろうかと考えて来た。

同じ青年と言っても、17才位に一つの区切りがあるのではないかと思われ、専門的にはそれ以前を青年期前期とか前期青年期と言い、それ以後を青年期後期とか後期青年期と言う。高校半ばから大学生にかけて似た様な心理を持つ様になるが、この辺りの心理が話の中心になる。そして、中学生の頃にやっておくべき宿題と17才以後にやらなくてはならない宿題とは種類が違う。青年期前期は大雑把に言うと、どういう風にして友達を作るかという問題に集約され、いじめっ子の問題とかなかなか仲間に入れない子供とか友達作りで一苦労する時代である。青年期後期になると少し変り格好良く言うと、どういう風に生きようかと言うことになる。表現力のある子とない子の差があって、頻りにそういう事を言う子と言わない子が居るが大体皆、自分に相応しい生き方を探る時代である。この頃になると男子も女子も大人から見ると変な格好をする様になる。あれは彼等のおしゃれであり、よく似ているがそれぞれ多少異っておりそれぞれ個性を出そうとして無理している様に思う。いかに自分らしく生きるかと言うことを無意識の中にやっている動きと考えられる。又、哲学書を読んだり宗教書に近づいたりする子もいる。時には「お父さんは何で生きているのか」等と難しい質問をしたりする。無気力ということが問題になるのは主として青年期後期である。

誰でも無気力になる。非常に疲れた時とか徹夜した朝とか病後とか理由のある無気力は何の問題もない。

早い人は一杯飲めば直るし、一晩で、あるいは2、3日もあれば大抵消える。それが健康というものである。問題ははっきりした理由がないのに延々と続く場合である。この頃は精神病が起きる年令であり、精神病の為に無気力になることもあるが、ここでは除外しておく。そして中には、勉強嫌いで勉強意欲がないにもかかわらず困りが非常に勉強する様な学校へ入学させられダウンするというケースもあるが、現在の青年の問題となるのは、頭脳も良く、病気でもなく、学生として生きていくのに絶好の環境が用意されているにもかかわらず無気力になるという不思議な事である。

まず第一に昔からこういう事があったのだろうかという事がある。つまり社会的な状況が問題なのではないかと言うことであり、我々が生きている日本の文化、とりわけ青年を取り巻く日本の文化に対して考えておく必要があるであろう。我々が青年であった時代と現在と比べて見ると、青年で居られる時間、つまり青年期が随分長くなったという事がある。これは文明の進歩と共にある程度やむを得ない事であり、そして恐らくこの事が青年の無気力を生む土壌として大きく関係するのであると思われる。現在、豊かになり中産階層が増え、両親が長寿になった。一昔前は青年は早く一人前になってお金を儲けて両親を養わなくてはならなかった。明治の頃はもっと顕著で、学校を出るということは、早く一人前になって親の恩に報じるべく、両親の老後を見てあげると言う事が大きな目標であったと考えられる。今や豊かになってヨーロッパ旅行をする為にお金が欲しいという様な人はたくさんいるが、両親をまず第一にと考える人はほとんどないと思う。至急一人前になる必要は、それ程切迫性が無くなって来たと考えられる。少し極端だが、平均寿命の80才位までお父さんが立派で経済力があれば、50才位まで親の脛をかじって良いのであって別に一人前になる必要がないと言える。割合優雅に長い青年期を楽しむ事が出来るが、そのもう一つの理由は、今日、技術革新が長足の進歩を遂げた事である。昔は大学を卒業したらすぐ一人前に働けたが、現在大学を卒業してすぐ一人前に働ける様な学部はまずない。大企業は卒業した大学生を社内教育して一人前にする。極端な例で言うと、明治の頃医学部を卒業すると翌日から山高帽を被って

往診に行ったり手術をしたり出来たのに、今は医学部を卒業してから10年位かからないと一人前になれない。今の医学生が劣るからではなくて、技術革新の勢いがあるものすごく、5年位してやっと習得したと思う頃又次の機械が出て来るという状態だからである。高度工業国家、高度産業国家になって技術革新が起って来ると否応なく徒弟時代、修業時代が延びる。早く大人になりたくてもなれないという事が起こる。青年期が長くなったという事は、今日の青年の栄光と悲惨の両面であると思う。いつまでも若く青年でいられることは羨ましい事である。40才位までネクタイを買った事がないという人が沢山あり、医者がとっくりを着て患者さんがネクタイを締めていてどっちがどっちなのかわからない様な事もある。若者の文化の中ではフォーマルな服装を格好良く思わないという事があるのである。反面、なかなか大人になれない、自分の生活スタイルが決まらないという苦勞がある。青年、とりわけ男子は、俺は俺らしい生き方をしたいと願うがこれがなかなか揃めない。明治の頃だと世襲と言って、親父から直接習って一人前になり親父の仕事継ぐ事が容易であったが、現在世襲出来るのはお坊さん、代議士、家元位のものであろう。世襲可能な家に生まれると男としては楽である。生まれた時から仕事が決まってお、大学は出ておいた方が良かったら、序でに出る位のもので一生懸命やれば良いのである。今の大方の仕事は世襲は無理であり、親父の仕事に関係なく自分で自分の仕事を作らなくてはならない。俺らしい生き方がなかなか決まらない。青年期が長くなったから、いかに生きるべきかという自問自答が長いこと読。時々大学を幾つも出る人がいる。A学部を出てからB学部へ来て更にC学部に入る。ある意味では優雅と言えるが大変である。A学部に行っても俺らしい物がない。B学部もやはりそうなのでもう一つという風に動かななくてはならない。日本はものすごく平等社会で、これだけ機会均等を与えられている国は少ないと思う。それだけに青年の方は大変だと言える。共通一次試験など非常に多勢の人が受ける。現在50代の人頃は、行かして貰えるだけの経済力があり、親父が高等教育を受けることを許可してくれると言う条件のある人だけが大学に進んだから5%位だと言う。今は30%位で争うのだから大変である。

一寸視野を変えて現在の青年問題を考える時、カリスマが失くなったという事が重大であると思われる。カリスマとは、無条件にその人のイメージに向かって進んで行ける様な人物像である。フランスのドゴール、中国の毛沢東、インドのネルという様な巨大なカリスマがあった。私共にはつい先達まで天皇陛下という巨大なカリスマがあり、今だに、天皇陛下と聞くと

気を付けをしてしまう様な所がある。教育の基本にカリスマが存在している文化と、これが余りはっきりしない文化とは違いがあると思われる。今の若者の中にはスターはあってもカリスマはないと思う。スターは歌手の様に出て来てすぐ消えてしまう人たちであるがカリスマと言うのは絶対的な価値があり、めだかの様に足並み揃えて向って行くものだから、青年にとって有った方が楽であろう。文化としては、カリスマのない文化の方が高いのであろうか、青年達がいかに生くべきかを考える時、カリスマのある文化とない文化では個人にかかる重荷が違って来る。カリスマのある文化の中には何か決めてくれると言う気安さがあるが、カリスマが死んでしまった文化では自分で探さなくてはならない。今青年達がお父さんや教師を尊敬しないのは、お父さんや教師の背景にいたカリスマが死んでしまったからではないかと思う。父親の威勢が下がり母親の比重が大きくなり教育ママという言葉が一寸揶揄を含んで与えられたりする様になる。医師の中には母原病と言う言葉を使う人もいるが、お母さん次第で子供の病気が出来る程お母さんがえらいとは考えられないし、それ程人間は簡単ではないと思う。ともかく母親の株が上って来たのに対して、父親の株が落ちて来たという裏にはカリスマが発見しにくくなったという事があると思う。そしてその事が青年の方針決定に影響を与えているのではないかと思われる。優秀な学生にふと無気力が起ったりする背景の一つに、自分の自分らしさを見つけない、一時代前の青年より苦勞しなければならぬという事情が伏在しているのである。心理学では、アイデンティティーの混乱とか、アイデンティティー探求の困難とか言われている。身分証明書をアイデンティフィケーションカードと言うが、アイデンティティーとは私が私であることの証明である。

次に個人の問題として、無気力という問題に直面し易い性格と無縁な性格があると思われる。無気力に陥り易い人というのは、怠け者と考えられ易いかも知れないが、寧ろそ真面目人間の方が無気力への距離が近い。三年寝太郎式の生まれた時からの怠け者には、改めて無気力という事が問題にならない。元来出来て然るべき人間が出来ないという事において問題なのである。教師も両親も子供が怠け者であるよりは真面目であること、だらしなくしているよりは几帳面であることを良しとする風潮が強い。それは当然であるが、一つ落とし穴がある。まだ生活の固まっていない中学生、高校生を余りくそ真面目型にしない方が良いと思う。

II 大学生のいわゆる退却症あるいは スチューデント・アパシーの特徴

名古屋大学へ非常に良い成績で入学するが2年生位になって何となく窒息してしまう様な状態である。退却神経症と言え、学校生活から退却して家を中心として生活する様になる。学校以外の所なら元気でやれるのである。英語でスチューデントアパシーと言う。その特徴は

(a) 努力型人間の無気力という逆説性

怠け者ではない、むしろ努力型人間が全く心理的理由で怠け者になってしまうという逆説である。

(b) 選択的退却(副業可能)

自分が競争しなければならぬ部分だけを選んで、そこから退却するのであり、その外の所では結構やって行ける。例えば、登校せず学校の試験は受けないのだが、家庭教師とかのアルバイトは一生懸命やる。工学部の学生であれば、工学部の勉強は面白くないけれど教育学部の勉強は面白くなって出来たりする。人生すべてが嫌になる全面的退却と異なり、本職をやらないだけで副業可能である。本職、本業というのは、常に目に見えない試験、評価があるが、アルバイトは幾らハードであっても人から評価され、点数をつけられる事がない。試験される、評価されるという事に抵抗が強く、なかなか試験を受けず、いつまでも卒業しないで大学に在籍する事になる。国立大学では授業料を払えば年限の倍、つまり8年在籍出来る。医学部なら12年、30才まで在籍する権利がある。まさに青年期の延長である。本当は、その学部合わないと思ったらぱっと転身させるだけの果敢さが教育者側に要すると思うが、現実にはなかなか難しい。

(c) 強迫的完全主義傾向の持主

完全主義とは、教科書で言う第1頁から全部覚えてしまわないと気が済まない事で、決して悪い性格ではないが、普通は適当にやまをかけて勉強する。最近の大学は、教えるべき知識ばかり増えて、非常に沢山の講義や実習がある。技術系の学部は尚更である。余程頭が良く、余程エネルギーのある人にしか全部マスターするのは無理である。それを完全にやろうとする。やまをかけたりという事は学生生活にとって必要な技術だけれど、中学時代からそういうセンスを磨かないで全部覚えると言う様な事ばかりやって来た人で、一寸見ると良い性格なのだが、完成してしまうとなかなか直しにくい。中学校、高等学校時代に「不完全の勧め」をやった方が良いと思うが、どこら辺まで不完全を勧めたら良いのか甚だ難しい。完全を勧める事は簡単であるが、完全主義の人に完全を勧める事は恐らく百害有って一利無しであろう。

(d) 優劣勝敗への過敏さ(「オリズム」)

完全主義もそうであるが、良い点数を取りたい、勝ちたい、一番になりたいと言う志向が非常に強い。負けそうな時には止めてしまう。ここに無気力と言う問題と通じる所がある。負けると言うことを恐がっており、負けそうな試合には始めから腹痛を理由に出でいかない。たまたま調子が悪かったから止めたのであって負けたのではない。麻雀で「おりる」と言う言葉を使う。敵が強そうな攻めをしたら安全牌ばかり振って放り込まない。上がる事を諦めて、安全に安全にゲームが進むのを待つ。勝敗からおりる、つまりオリズムである。一寸した悲喜劇がある。今度の試験こそ通らなくてはならないと思って、第1頁の第1行から一生懸命覚えてゆくのだが、大抵試験の前日の夜中になっても全部は読み切れない。すると翌朝の試験はおりざるを得なくなる。追試験を受けなくてはなくなるがこれも同じ事を繰り返す。完全主義者の無器用な所である。

(e) アイデンティティー(「自分とは何か」)

自分とは何かと言う事に人よりはるかに真剣に、かつ執拗に繰り返し問う性格である。自分はこの学部で良いのだろうか。就職してからでも、この職業に就いたがこれで良かったのだろうかと常に迷っている。アイデンティティーと言うには厄介な世の中になっているが、元気な人は「まあどうかなるだろう」で済むのだが、その精神はこの人達にはない。

(f) 成人拒否(「永遠の若者」志向)

大人と言うのは、大体固まってしまう事である。専門が決まり教師なら教師、医者なら医者で生きる事である。ところが、自分とは何かと言う事ははっきりせず、自分の道が決まらないから、成人になる事を延期して、出来るだけ青年でいる期間を長引かせ様とする「永遠の若者志向」が生まれる。しかし、仕事柄永遠の若者志向が役に立つ職業も存在するであろう。芸術家とか研究者は永遠の若者性が無いと常に新しいものを創り出して行けないが、その外の仕事ではしっかりと大人にならなくては困る。例えば銀行マンは、若々しさを捨て現代資本主義の中核にいるだけの大人性みたいな物を持たないと勤まらない。しかしこのタイプの若者はずっと若者でいたがる傾向にあり、ネクタイに象徴する訳ではないが、なかなかネクタイを締めない。銀行マンは常にきちんと締めているが、大学の先生で締めている人は3割位であろう。芸術家は全くネクタイが嫌いである。これも成人拒否の度合を表わしていると思う。

(g) やさしさ志向性

余り競争を好まず、勝敗に敏感であり、いくら負けても又起き上って向って行く様な荒々しさが無い代わりに大変やさしい性格である。この荒々しい世の中では評価されて然るべきであるが、選ぶべき仕事としては生き馬の目を抜く様な株の世界等はとても無理で、社会福祉とか教育とか医療と言ったどちらかと言えばやさしさを本質として必要とする様な仕事が良いであろう。

大体こんなイメージである。決して怠け者ではなく、真面目人間であるが、一寸要領の悪い真面目人間である。高校位までの教科であると努力型で完全主義傾向で十分熟すことが出来、優秀な生徒と評価されていたのだが、大学に入って否でも挫折体験をせざるを得ないし、否でも負けたり頭を打たざるを得ない。そういう場面に至った時、今までに練習をしていないのでひっくり返ってしまう。そういう意味では、何時もストレスで試験に通っている様な人は先生に叱られたりしてボクシングで言うボディブローに強い。そういう格好の無気力が、現在の日本の高学歴青年の問題として割合広く浮かび上っている。大学生の例を挙げたが、職業に就いてからその職業がどうも性に合わないと言って、もう一度大学に帰るとい様な人も中にはある。

Ⅲ 青年期前期の神経症性登校拒否生徒との比較

青年期前期に焦点を移してみる。小学校高学年から17才位までの子供である。名大の優等生が途中で失速してしまうのと似た現象に登校拒否の生徒がある。これは小学校高学年から起り、中学生になると、1つの中学に1人いるかいないかの程度であろうが全国で集計すると可成の数の生徒がいる。この中には、非常に性格が内向的でなかなか人の中に入って行けないとか、少し知能が遅れていてその為に苦労するとか、理由がはっきりしている人もあるが、知能も悪くないし家庭の環境やその他の条件もそれ程悪くないにもかかわらず登校したらない人があり先生方を大変悩ませる。この人達も、青年期後期の無気力の人達と似ていて、完全主義的きっちり人間が多く、怠け者ではなくそ真面目型である。無気力の人達と違って幼ないので、自分がどんな事に苦しんでいるかと言う事を口に出してしっかり言えない事が多い。これが先生や両親を非常に悩ませる。お母さんに「どうして行かないの」と聞かれても自分も分らないので行動をもって反応し、お母さんに乱暴するという事になる。家庭内暴力と言う言葉が使われている。平生から凡そ言う事をしそうにない子が驚く事にお母さんに暴力を振るったりするから家庭内暴力とわざわざ言うのである。無気力

の人達は、自分の中にどう言う不安があって行けないか、つまり優劣を争わなくてはならない様な時に負けると言う事の恐怖があってなかなか勝負が賭けられない等と言う事が分かっているが、学校へ行かないと言う事は非常に悪い事だと頭で思っている、どうして行かないのかと言う事は良く分からない。まだそれを自分で意識するだけの成熟度に達していない。やはり周りの者も不安で「お前どうして学校へ行かないのだ。行かない以上理由があるだろう。」と聞く。ところが本人は何が不安か分からないのに聞かれるから行動で反応すると言う事になる。

青年期後期の人達の不安と違ってこの子達の最大の課題は仲間達の事である。仲間はどう言う風にして入るか、と言う事である。小学校高学年位では皆同性のグループで遊んでいるが、だんだん小さいグループになって来て2、3人位の仲良しが出来て来る。学校でつい先程まで顔を合わせて遊んで来た筈なのに、家に帰って又電話で長い事話したりして電話を占拠され困る事もある。重大事件を話している訳ではなく、実につまらない事を話しているのであるが、内容をお父さんお母さんにはなかなか言わなくなる。「これは友達と約束した事だから口が裂けても言えない。」と言う様な啖呵を切ったりさえる様にもなる。電話を使うのも、お母さん達に言わなくなるのも友達を形成して行くプロセスでは必要な事であろう。この頃は非常に微妙な友達作りの段階があり一生懸命友達を作っているのである。お母さんには余り言わないが、子供は子供なりに人知れず悩みがある。いじめっ子問題も勿論あるだろうし、仲間に入れて貰えたかと思うと次の日は入れて貰えないと言う様な事や、自民党顔負けの派閥がたくさん出来てあっちに付いたりこっちに付いたりする。そういう時代を経て、青年期後半に数人の親友関係が出来れば非常に健康なプロセスである。その頃に異性の友達も出て来ると申し分ない。こう言う意味で、中学校・高等学校は、半分は勿論勉強しに来ているのであるが、半分は友達作りに来ていると言う教育的役割があると思う。だから学校へ来ると言う意義は大きく、どんなに苛められても毎日登校すると言う事は非常に健康な事である。

しかし、学校へ行くのは当たり前みたいに思っているが、この頃の子供には学校へ行くのが非常に辛い時もあると言う事を知っておいてやる必要があると思う。登校拒否を起こす原因は、意地悪な友達が居るからと言う様な単純な事では決してないが、結果とすると暫く休むと学校という所は実に行きにくい所である。風邪を引いて3日休んだだけでも4日目に出て行くのが敷居が高いのに、1月休んで出て行くのは尚更である。友達から置いてけぼりを喰うし、又置いてけぼりを喰

われないかと言う恐怖が倍加する。そう言う意味で大学生の年代とは一寸違った苦勞がある。

IV 強迫性格の功罪

完全主義的な性格の人は非常に綿密であり、何処か抜けてしまう様な事もなく信頼が置けるが、マイナス面がある。お母さんが非常にきっちりしていたから子供もきっちりしたと言う事もあるが、お母さんはルーズなのに非常にきっちりした子供が出来たり、お母さんはきっちりしているのにルーズな子供が出来たりするからお母さんの教育と言うだけではないサムシングがある。きっちりすると言う事は心理学的には次の様に考えられる。人間の生活には非常に不確かな部分が多い。何時病気になるかわからないし、何時死ぬか、明日何が起こるかもわからない。この不確かさを何とか引き受けながら生きている訳である。何が起こるかわからないと言う事は非常に不安である。その不安を少しでも減らして行こうとするための方法の1つがキッチリズムである。

朝何時に起きて、掃除をして、次はこうしてと、出来るだけ自分の生活のパターンを決めて、自分が不確かな部分を減らそうとする。次の方法は余り冒険をしない事である。見知らぬ土地へ行ったりは勿論しないし、バスは毎日同じバス、朝行く道と夕方帰る道も同じにしておく方が安全である。第三の方法はおまじないである。生活の中には随分おまじないが沢山ある。葬式から帰って塩を撒いて、不確かな部分を出来るだけ消そうとする訳である。強迫性格の罪の方は、生活パターンを決めて、冒険もしないから生活圏が狭く、自由度が少ない事である。自分のパターンを決めるとそれに従ってしか生きる事が出来ず、それを破る事は非常に不安が生じる。物を片付けるのが非常に好きで、物さえ片付けさせておいたら機嫌が良いと言う様に物理的な空間をきちんとする人。誰方から貰い物をしたら必ずお返しすると言う様に対人関係に几帳面な人。朝起きてから寝るまでの生活のパターンをきちんとする人と言う様にそれぞれによってキッチリ型の部分は違うが基本は同じである。

V 現代社会の内蔵する強迫傾向

私達の生活、特に男の世界は非常に強迫的である。管理社会と言われているが、始業時間も休憩時間も終業時間もすべて決まっており、休暇を取る時は年休の申請をしなければならないとか不自由である。ビュウオクラリズムで、官僚政治が発達するとどうしてもこうなるのであるが、日本はその典型で、嫌になる程強迫的なキッチリズムの世界の中で暮らしている。大学の先生も10数年前までは、安い給料の代価として自由

が支払われていて家で勉強していても学校で勉強していても構わなかったが現在は厳しくなった。新幹線、あれもキッチリズムである。あんなに時間通りに着かなくても、と思わないでもないが、私達の方も強迫的な物差しを自分の中に持っていて、当然着くべきであると思ってもいる。外国では汽車が時間通りに着かない国の方が多いと思う。日本はそう言う意味では社会全体の中にキッチリズムがそれとなく細かく組み込まれた文化と言えるのではないだろうか。もっともキッチリズムの建築工学を信じるからこそ、都心の60階のビルにも泊まれるのであって、キッチリズムを否定する訳ではない。むしろ高度産業国家は強迫的完全主義的文化なしには成り立たない。昔の農耕民族的な暢気な時代が良かったと言うのも決してない。にもかかわらず、優秀な青年が無気力になると言う事のファクターの一つに少しきっちりし過ぎる人と言う性格傾向がある以上、余りそれを助長しない様にしてあげるのも教育ではないだろうか。

ずぼらな人間をキッチリさせるのは勿論教育であるが、もともと几帳面な人を更に輪をかけて磨き上げると言う事は、両親や教師達の罪なのかも知れない。常に教育と言う問題はこの様に矛盾を孕んでいる。元来人間に関する事だからである。日本経済でいかにお金を儲けるかという様な話は割合すっきりしているが、人間をどう言う風にもって行くのが、我々にとって、日本にとって、世界にとって本当に素晴らしい事なのかと言う事を真剣に考え様とすると、なかなかすっきりした答えは出て来ない。これは人間を相手にしているから当然であるが、過度の完全主義人間を作ると言う事には、多少、どこかで歯止めをかけて行く教育を考えた方が良いのではないだろうか。それは大学に入ってからではなかなか直し難く中学校位からやらないと駄目なのではないか、と言うのが今日の話の結論である。

〔記録 酒井為久〕